

ビシーの思い出

山下 雅知

留学先：オテルデュー病院（パリ）

Hôtel Dieu (Paris)

留学期間：1989年7月～1990年3月



左写真は Vichy にあった語学学校 CAVILUM (Centre d'Approches Vivantes des Langues et des Médias) の屋根裏教室です（左端：和泉充さん 左4番目：高柳和史さん 中央：筆者 右端：杉原秀樹さん）。語学力が不足していた我々は、ここで2か月にわたる語学研修を受けました。留学生仲間とは、一緒に食事やスポーツを楽しんだり、いろいろな所に遊びに行ったりしました。CAVILUM には付属のテニスコートがあったので、語学授業後は、ほぼ毎日テニスをしていました。ところが実は、そのコートは地元の有料クラブのコートで、CAVILUM のコートはもっと離れたところがありました。今では笑い話として話せますが、1か月ぐらいして係員から間違っただけで無賃利用していることを指摘され、大目玉を喰らいました。

Vichy は有名な温泉地で、年配者がたくさん避暑で滞在していました。本場の Vichyssoise スープを地元で飲もうとしましたが、そんなものは存在せず、ニューヨークのリッツ・カールトンホテルの Vichy 出身のシェフが勝手に名づけたスープだと、後で観光ガイドで知りました。Vichy のすぐ近くには Clermont-Ferrand という街があって何度か訪れましたが、ここにはゴシック形式とロマネスク形式の2つの教会があって、素人にも判り易い対比をなしていました。近場だけでなく、CAVILUM の遠足でロワール地方の古城を巡ったり、SNCF でバルセロナに遊びに行ったりもしました。右写真は、レンタカーで阿部郁朗さんや隅屋寿さんと Montpellier に行った時の写真です。Vichy から往復約 1000km を1泊2日の強行軍でドライブしました。

9月に入ると秋雨があって昼が短くなり、これを境に避暑客も減少し Vichy は寂しくなっていました。やがて我々の語学研修も終わり、留学生はそれぞれの目的地に旅立つこととなります。私は、Paris のシテ島にある Hôtel Dieu という病院に赴任しました。自分の専門領域以外の様々なジャンルの人々と付き合うことができたのも、留学の一つの成果といえるかも知れません。

“biodégradable” という言葉は、高柳さんから初めて教えていただきました。Vichy の日々は、今から振り返ると、さながら「遅れてきた青春」という感じでした。



さて、Hôtel Dieuは7世紀に創設された世界最古の病院で、有名なNotre Dame寺院の隣にあり、古風な城のような病院です。「我包帯す、神癒し賜う」(Je le pansai, Dieu le guérit.)という名言で有名なAmbroise Paréをはじめとして、Dupuytren やDieulafoy などの大外科医を輩出しています。上左の写真の中央にも、Dupuytren像が建っているのが小さく見えます。Hôtel Dieuは歴史ある病院でしたが、設備はかなり老朽化していました。interne用の食堂も古びていましたが、昼食は前菜から始まってメインから食後のチーズに至るまでフランス流で、とても美味しくさすがでした。食後にはワインも出たので調子に乗って飲んで、酔っぱらって手術に入ったこともありました。それ以後、食後酒は飲まないようにしました。食堂の壁には、教授陣のカリカチュア(春画)が描かれていて笑いました。

救急医療では、フランスはアルジェリア戦争の際に軍医が兵士を最前線で治療した経験を基に、全土に公的救急医療組織であるSAMU (Service d'Aide Médicale Urgente) を展開していった国で、ドクター・カーにより事故現場で処置を開始していくSMUR (Services Mobiles d'Urgence et de Réanimation) というシステムが有効的に運用されていました。上右の写真は、ドクター・カーでAvenue des Champs-Élyséesに向かい、交通事故患者に副木とネックカラーを施している様子です。保温用のアルミ・カバーも掛けられています。ただし、フランスには救急科専門医は存在せず、Hôtel Dieuでも、夜間休日は内科系と外科系のinterneが交代で救急患者の対応をするという旧式のシステムでした。大先輩の岡田和夫先生(日本蘇生協議会会長)は1960年にパリのClaude Bernard病院に留学し、ポリオや破傷風などの呼吸不全の患者にずらりと最新式のEngstromの呼吸器が使用されているのを見て、カルチャー・ショックを受けたと聞きます(東大病院はまだ「鉄の肺」の時代でした)。私の場合にはそのような衝撃はなく、その後アメリカに渡って、米国式のER型救急医療を学ぶこととなります。米国では、ニューヨーク州立大学Stony Brook校でステロイドの研究を続けていた阿部郁朗先生と再会し、今度は一緒にニューヨークを観光しました。世界は狭いなと感じました。

最終学歴：東京大学医学部医学科 (1982年3月)

現職：帝京大学ちば総合医療センター ERセンター長・教授

専門：救急医学